



防風林として沖縄の人々の暮らしと財産を守る「ふく木」にちなんで命名された「ふくぎ苑」。建物に入ると、入居者の子ども時代、青春時代の写真が貼られた「私は誰でしょう?」のコーナー(写真下)がまぶ目を引く。



玄関フロアには折々のイベント写真や入居者の手作り作品が、施設長の入居で、著名な沖縄伝統芸能のゲストが公演に訪れる。

「ふくぎ苑」の特徴

1 介護度が進んでも同じ建物内で看てもらえる

当初は自立支援型ケアハウスだったが、平成22年8月に1、2階の28室を特定施設(介護型)に変更したケアハウス。特定施設の入居者は24時間、介護が受けられる。現在、胃ろうの人、車椅子の人もある。

2 保証人は遠方の人でも大丈夫

保証人は2名必要だが、居住地が遠方でもOK。現在、茨城、埼玉、神奈川、長野、愛知、広島、大分、鹿児島、アメリカからの移住者もいる。病気のときなどは、保証人にすぐに連絡してくれる。

3 夜間でも誰かがいる安心感

体調の悪いときには、スタッフが夜中も気にかけてくれるし、突然、具合が悪くなってもナースコールを押せば飛んできてくれる。介護の専門家と同じ建物内にある安心感は、何ものにもかえがたい。

4 家族経営ならではの温かさが

元市議会議員のご主人が理事長、元音楽教師の奥さまが施設長。長男が事務長でお嫁さんは栄養士として「ふくぎ苑」に勤務。家族の結束が強い沖縄ならではのアットホームさ。職員と一体となって運営に当たっているがゆえの、マニュアル経営にはない温かさが特長。

5 宿泊体験してから入居を

一人泊4000円で体験入居ができる(食事つき)。また、入居者の家族がゲストルームに一泊すると5000円(食事つき。ただし、2泊3日以内)。入居者の居室に家族が泊まる場合は食費のみで、布団はリースできる。

屋上からは海が見渡せる。散歩をはじめ、元旦の「初日の出ツアー」や、浜で油感を飲む夕べ、ビーチパーティーなど、海辺での楽しみは多い。



食堂正面には舞台が、グランドピアノが設置され、取材当日は、施設長自ら飾り付けた紅型染めや大きな扇が華やかさを添えていた。



食事はケアハウスの自立者も要介護者も一緒に食堂で。誰とでも仲良くという趣旨で、3か月に一度、席替えがある。談笑風景や訪問した家族が食事介助をする姿も見られ、和やかな雰囲気が漂う。



栄養士の平良美佐子さん(左)は長男のお嫁さん。この日の昼食はになり寿司、おそば、天ぷら、野菜の和え物、ミカン。沖縄料理やおせち料理が出ることも。



奥間清子さん。平成14年、ふくぎ苑開設時に夫婦で入居し、6年半暮らした。ご主人を見送った後、横浜の息子さん宅に移ったが、沖縄の住心地のよさが忘れられず、息子さんの反対を押し切って約1年前にふくぎ苑に戻ってきた。6畳和室(写真下)にすっきり暮らす。



94歳の仲松勘さん。宮古島出身の東京育ち。判事だったご主人亡き後、8年前に移ってきた。「家で食べて、編み物して、皆と仲よく交流なく暮らしています」といふ。庭には仲松勘さんが育てた大輪のハイビスカスが咲く。自室のベランダ(写真下)で植物を育てるのも楽しみだとか。



を大切にしています」とと京子さん。入居したのはかりの人には早くお話を解けるように、職員全員が毎日5分ずつ声をかける。また、認知症で怒りっぽかった人も「私の得意技でおしやりで打ち解けて、穏やかにになりました。沖縄の美しい空と海、厚い人情が忘れられず、退去した人が、また戻ってくることもあるとか。そんな一人、奥間清子さん(80歳)は「券

開気の温かいことが最大の魅力。他人同士が一緒にいるのに不思議と違和感がないんです。以前は元気な人用のケアハウスでしたが、今は特定施設のヘルパーさんが同じ建物にいらして心強いんです。桃源郷で暮らしているようだと微笑んだ。



特定施設に入居している平良トミ子さん(95歳)。長男も二男も一級建築士。その設計事務所食堂を78歳まで切り盛りしていた。曾孫20人の訪問が何よりの楽しみだとか。



移動パン屋とヤクルト販売が週一度、建物前まで来る。月・金曜日はスーパーまで車で送迎する買い物デイ。

に住むというご夫婦も。ここに来たことでリウマチの痛みが軽減した人や介護度が低くなった人もいます。沖縄舞踊をやっていた施設長の平良京子さんが「ふくぎ苑」のイベントには、沖縄の有名な施設のことや有名だ。施設長自ら伝統衣装に着替えて歌や踊りを披露することも。「笑顔、思いやり、目配り、心配り

沖縄の自然に触れて、健康不安の人も元気になる。ここ「ふくぎ苑」は平成14年に自立支援型ケアハウスとして設立され、平成22年に28室が特定施設(介護型)として認可された。3階に元気な人が、1、2階に要介護の人が暮らす混合型ケアハウスだ。奥さんが特定施設に入り、独り暮らしになったこ

主人は食事作りなどが大変で、同じ建物の3階に引っ越してきたというケースもあるという。

現在、ケアハウス在住の22名中14名は他府県から移住してきた人たち。食事やお酒を飲み出かけた人、買い物やゴルフに行ったり、マージャンをしたり、スバに通うなど、沖縄の暮らしを存分に楽しむ人が多い。夏は長野の自宅に帰り、冬だけ沖縄

冬も温暖な沖縄で、のんびりゆったりと第二の人生を送る。楽しくリゾートライフを満喫し、介護が必要になったら、同じ建物内の特定施設に移ってケアを受けられる



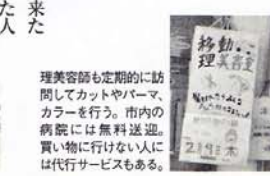
子どもに頼らずに、安心な老後を迎えるために

女が最期まで幸せに暮らせる

「終の住み処」の探し方 16

年齢を重ねると寒さが身に沁みるようになり、暖かいところで暮らしたいという願いは強まります。シニアの移住先、ロングステイ先として人気の沖縄で、ゆったりと暮らせるケアハウスを見つけた。要介護になっても安心して暮らせる住まいです。

名称	ふくぎ苑 自立支援型と介護型の混合型ケアハウス
所在地	〒904-1106 沖縄県うるま市石川3409-8
アクセス	沖縄自動車道、那覇ICから石川IC。経由で約40分。 那覇から高速バス利用の場合、約1時間(石川ICで下車し、そこからタクシー)
連絡先	☎098-964-4115 FAX098-964-5778 http://www1.ocn.ne.jp/~fukugien/
建物	鉄筋コンクリート造り、3階建て (敷地面積2646.7㎡)
居室	一人用23.4㎡(45室) うち28室は特定施設 二人用35.64㎡(5室)
居室設備	トイレ、シャワー(夫婦部屋には個人浴室あり)、洗面台、ミニキッチン、冷蔵庫、押し入れ、ベランダ、ナースコール、洗濯機置場
費用	入居一時金30万円(退去時、居室補修費を除いて返金)、管理費1万7150円+生活費(食費)4万2490円(11~3月は冬期加算1880円)+事務費(年収に応じて異なる)月額合計6万9640円~13万640円。居室の電気代、水道代は実費。介護度が上がり特定施設入居者生活介護費を払うようになると別途1万7701円(要介護1)~2万6381円(要介護5)+おむつ代実費
運営	社会福祉法人 ふくぎ会



大浴場は午後5~7時と午後7~9時に分かれて男女が入浴(半月ごとに入れ替わる)。各居室にはシャワーが設置されている。